『日本の未来』

日本には未来がない。

新年早々、不届きなことを言うと叱られそうだが、これは日本の国のことではなく（そちらも心配の種に事欠かないが）、日本のことば、すなわち日本語の話である。

お気づきだろうか。日本語には未来という時制がないのである。

そんなことはない、私たちはちゃんと未来のことを話題にしているではないか、そう言われるかもしれない。それはその通りで、つい一、二週間前も「来年のことを言うと鬼が笑う」とか口では言いながら、新しい二〇〇七年のことをさんざん話した。

しかし、それは未来ではないのである。少なくとも文法的な未来ではない。たとえば明日のことを語る時、私たちは「では正午に来ます」と言う。これは文法的には現在である。確定的なことでない時は、「彼も来るでしょう」と言う。これは推量である。いずれの場合も、未来という時制とその動詞変化ではないし、それ以外に未来固有のもの言いを私たちは持ってはいないのだ。日本語に未来がないというのは、そういうわけである。

対して英語やフランス語には確かに未来が存在する。英語の will とか shall なら、もう中学生でも知っていることだから、明日のことをどう伝えたらいいか、迷うことはない。

ところがその外国の未来にもまったく問題がないというわけではない。これはメリメというフランスの作家（そう、『カルメン』の作者）が、あるユーモア小説の中で言っていることで、孫引きゆえ事実かどうか保証の限りではないのだが、「誰しも『今日一日私は幸福でいるだろう』と未来形で断言するのは不可能だ、と古代ギリシャの一哲人が言っている」そうである。つまり未来は常に不確定だから、未来形には事実を断定する力がないのである。言ったとしても、いずれ当て推量にしかならない。

たぶんそういった事情もあって、フランス語では未来の時制を未来のこ

『日本の未来』

とではなく推量の意味合いで使うことがある。たとえば「明日の正午には終了しているだろう」といった意味の未来完了を、「もう終わっちゃったらしい」という過去の推量として使ったりする。日本語が未来を言うのに推量の表現を使うのとちょうど反対になるわけだ。

ことばは便利な道具だが、じっさいはとても不備なものである。その不備な部分はしかし、同じ言語を母語とする共同体の内部では自覚されないのだが、別の外国語と比べてみることで初めて明らかになる。

だが人間は学習する動物なので、足りないことばを別のことばで置き換え、新しい言い方（用法）を作り出したりして、工夫を重ねていく。ことばというのは精神や意識の写し絵だから、ことばが複雑になりニュアンスに富むことは即、頭の中の引き出しが増えたのと同じことなのだと思う。

外国語を学ぶということの意味も、じつはこの辺にあるのではないだろうか。外国語はけっして海外旅行の安直なガイドなんかではなく、日本語を豊かにするための素材なのだ。もし外国の言語と出会わなかったら、私たち日本人は「彼」とか「彼女」という三人称の代名詞も持つことがなかったはずである。この二百年間に日本語が外国語によってどれほど豊かになったか、計り知れないものがある。

新しい年、一念発起して新しい外国語の学習を始めてみるのはどうだろう。精神に未知の小道が開けるにちがいない。

本文初出：北国新聞「北風抄」二〇〇七年一月
ホームページ掲載：二〇二三年一月二三日